

## 忘却のタニンバル -- ここだけの言語をもつ村マカティアン (フォト・エッセイ)

著者	大津 伸子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	125
ページ	35-38
発行年	2006-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00047468">http://doi.org/10.20561/00047468</a>

# 忘却のタニンバル— ここだけの言語をもつ村マカティアン

写真・文  
大津伸子  
Nobuko Otsu



屈託のない笑顔の小学生たち

六六島からなるタニンバル諸島（現在、西東南マルク県）を巡るには、船の利用が欠かせない。五〜九月の雨期、一〇〜一月の乾期に加えて、本島のヤムデナ島は二〜九月の東風、一〇〜一月の西風による高波が立ち、東と西側では気候が異なる。さらに浜の出入りは潮の干満に委ねられ、船の旅は自然を無視できない。乾期で比較的海が穏やかな一月中旬、県の文化・観光局の調査プロジェクトに同行し、ヤムデナ島を東から西へ一巡りした。

一七世紀初頭に始まったオランダ東インド会社の南島探検に記された歴史上の足跡と現状を自分の目で確かめる。今回必ず訪れると決めていた場所が、ヤムデナ島西側にあるマカティアン、ここだけの言葉をもつ村である。オランダ艦隊コルフの航海日誌によると一八二五〜二六年フォルダタ島、ララット島、ヤムデナ島、セラ島を回り、東インド会社の公式鑑札として村長にオランダの旗と代理任務を授与するが、ヤムデナ島マカティアンで一行は攻撃され、一人が殺された。タニンバルは言語学上オーストロネシア語に属し、ヤムデナ語、フォルダタ語、セラ語、セラル語、ヤルワサ語、マカティアン語に分けられる。一村だけの言語を有し、オランダに勇猛果敢に対峙した人々が住むマカティアンとは、一体どんなところだろう。

県都サウムラキから北のララット島までスピードボートで五時間。先のセラ島の帰





樹木で目隠しされたマカティアン村



茹でるか焼いて食する甘いスクンの実。食べごろは12月



サンゴと貝殻を敷きつめた道の家並み

路、高波の揺れで腰を痛め、行きは一二時間かかるフェリーに乗船となった。ララットに先回りした船の燃料補給に手間取り、またマカティアン行きを渋る操舵手を説き伏せ、いよいよ出発。マカティアンまで四時間だとすると、到着は日没後だ。照明設備のない船のことを考えると心もとない。ヤムデナ島の西側に回ると右手に大小の島々が連なり、船は島々を追いかけるように急ピッチで進む。突然「ルンバ・ルンバ」の歓声上がる。イルカの大ジャンプだ。インドネシアの海でイルカが遊泳する姿を何度か見たが、こんなに高く宙に舞うのは初めてだ。

船のスピードが落ち、村は近い。日はとつぶり暮れ、真つ暗な海岸線に目を凝らして村の明かりを探る。浜までかなりの距離を懐中電燈と月明かりを頼りに目測の航行は至難の技。サンゴ礁や藻がスクリューに引つ掛からないように藻をかき分け浜に上がる。ワクワクする好奇心と未知の土地に踏み込む恐れとが交差する。

あいにく村長が不在のため、書記官宅を訪ねる。夜にもかかわらずトゥアン・タナ（最初にその土地に定住した血筋）と呼ばれる村の主と村役人が集う。当地の慣習に疎い観光局職員の言動に村の主が怒りを露わにし、一時空気が張りつめた。入村儀礼に必須のソピ（ヤシ酒）の持ち合わせが無く、儀礼は明朝改めて行うことで話がまとまり、やっと泊まりの交渉に漕ぎ着けた。





収穫物入れ編み籠を頭から掛け、森の畑へ



獲った魚を家路に運ぶ（1尾、約60円）—フォルダタ島ルミアン



トゥアン・タナグソビで入村儀礼を執り行う

夜半は海風が天窓を抜け、かなり冷え込む。鶏の鳴き声で目が覚め、書記官の案内で村を一巡りする。各戸は垣根で仕切られ、大半はトタン屋根だが、昔ながらの椰子の葉葺きの家屋もある。マンゴ、パイヤ、ジャックフルーツ（ナンカ）、スクンなどの果樹や草花が植栽され、どこも小奇麗でゴミひとつ無い。食は森の狩り、漁、森の開墾地でイモ類、野菜など焼畑耕作による自給自足。人口は二七八世帯一三六〇名。小学校は公立とプロテスタント系の二校あり、中学と高校は無く、近くのセラ島へ船で通うか、本島のサウムラキに下宿する。一時出ても卒業後この島に戻って来る。無医村だが、週二回巡回診察がある。

揚芋、揚パンと甘い紅茶をいただき、入村儀礼に入るが、「この村にはこの村のやり方がある」と村の主になじられ、職員はソビの追加調達に走った。儀礼の詞はマカティアン語なので分からないが、多分入村の許しを祖先に請うたのであろう。続いてソビを床に注ぎ、最初に村の主がソビを口にし、次々に参列者が回し飲みをする。かなりのアルコール度で喉が痛い。晴れて入村が認められた。

村のルーツは一四世紀に遡り、山の手にあった二集落が一村のラティナ（試みるの意）になり、更にマティナからマキアンに変化し、一六世紀に現在名のマカティアンに落着いた。伝説によるとサタンが夫婦を創造し、ハトゥ・クニン（黄の石の意）と





老女が綿から糸にする昔からの紡ぐやり方を見せてくれた



再訪時に改築されていた天にそびえるプロテスタント教会



多種の貝が散在する遠浅の浜

いう洞窟に住み、家族を増やす試みを繰り返した。今もその洞窟には黄金の蛇が住むといわれ、白い鶏を犠牲に捧げる。蛇の皮は祖先の化身とされ、靈魂再来を表し、織布の文様に施される。野豚、鳥、犬、ワニの肉は食するが、野生のモア（水牛）の肉はタブーだ。

一九一一年以降キリスト教化が進み、伝統儀礼、伝統文化が失われてきた。かつて葬送は死後五日間遺骸を室内に安置した。その後木棺に入れ、肉が朽ちた骨だけをまとめて森の神聖な場所に埋めた。現在は死者を布で包み、鶏、豚、米を供え、参列者で共食する。森の樹木のうち、メンテ（カシューナッツの木）、ジャティ（チーク）など四種の伐採には儀礼が行われる。キリスト教に差し障りのない慣習は少しずつ形を変えつつも継続されているようだ。

世界で毎年五つの言語が失われている中、マカティアン語も学校教育では使われず、行く末が懸念される。生命に必須の「水」の語は「ウエイエ」。フォルダタ語は「ウエアール」、インドネシア語は「アイル」。水に関係が深い川は「ラエ」といい、フォルダタ語は「ケマス」、インドネシア語は「カリ」、「スンガイ」。

話が興に入り、知りたいことは山ほどあるが満潮の時刻が迫る。名残惜しいが、再訪を期して浜に向かった。

（おおつ のぶこ／フリーランスライター  
I&Cコーディネーター）